第 69 回全国体育学習研究協議会　東京大会へのお誘い

全国体育学習研究会会長　鈴木秀人

民間の教育研究団体として、1957（昭和 32）年の発足から、今年で 67 年にもなる長い歴史を積み重ねてきた全国体育学習研究会（全体研）の全国大会（全国大会は、全国体育学習研究協議会と呼んでいます）が、本年度は東京で行われます。

東京は、全体研が生み出した我が国の代表的な体育授業論である「楽しい体育」の考え方を初めて提起した、1979（昭和 54）年の第 24 回大会を開催した地になります。この大会は、それまでの「正しい豊かな体育学習」から「楽しい体育学習」への理論的転換という大きな課題と向き合うために、全国大会では異例の授業提案がない全国大会となりました。

これ以降、全体研の歩みは今日に至るまで、この時に提起され、皆で共有し、そして継承してきた「楽しい体育」という考え方を常にブラッシュアップしながら、日々の授業実践へよりよい姿で具体化する取り組みでありました。それは今回の全国大会でも変わりません。

全体研が主張する「楽しい体育」の大きな特徴は、体育という教科の独自性を人間と運動の関係を問題にする教育であるところに求め、そこで取り上げる運動を、人間にとって文化として、そしてその中のプレイとして理解し、社会の変化を見通しながらそういった文化、プレイとしての運動を学ぶ場として体育の授業をつくろうとする点にあります。したがって、「ああ、楽しかった」「楽しくなかった」というような感情のレベルではない、それぞれの運動に固有の「面白さ」「楽しさ」を大切にし、それを全ての子どもたちが味わえるような体育の学習を具体的につくることが、本会の研究の中心です。

しかしながら、体育だけでなく教育実践の現場においては、こういった授業づくりの基盤となる考え方＝思想を問う姿勢は弱くなる一方、ICT の活用のような方法の工夫が授業の研究に置き換わってしまっている状況も少なくありません。そのような状況だからこそ、具体的な実践を根底で支える基本的な考えを論じ合い、それをゆるやかに共有しつつ、それぞれの学級の子どもたちの現実を注意深く観察しながら、よりよい学習の在り方を探究していく教育研究が必要なのではないでしょうか。

また、家庭環境の格差が学力の違いに反映されているという昨今の深刻な教育問題は、そのまま運動経験の格差の問題ともなっています。全体研が大切にしてきた、全ての子どもがそれぞれの運動に固有の面白さを味わうことを保障しようという取り組みは、あらゆる子どもたちに運動の機会を保障するだけでなく、誰もが参加する体育授業におけるその質を探究するもので、そういった取り組みはより一層求められる社会状況になっています。

第 69 回大会のサブテーマである「多様な他者と運動の面白さに触れる」は、この社会的背景を視野に入れた研究テーマでもあります。皆様、ぜひ、東京の地へご参集ください。

ここに、第 69 回全国体育学習研究協議会東京大会へお誘い申し上げます。